TSUNAGU+believe
2022 Spring vol.15
関西医科大学と地域をつなぐ連携誌［つなぐ］

関西医大の災害対策

万が一でも頼れる病院

INDEX

巻頭 特集
災害対策・災害医療

■附属病院
新任教授に聞く　井上 健太郎　04
最新医療トピックス　山崎 誠　05
大学病院の、脳ドック　06
オンライン・セカンドオピニオン外来　07

■総合医療センター
コロナ禍における取り組み　三島 伸介　08
室田 卓之
吉矢 和久
入院前支援体制　平谷 栄美　10
地域連携Webセミナー　徳原 克治　11

■香里病院
新任教授に聞く　石丸 裕康　12
吸入指導ネットワーク構築　延山 誠一　14

■くずは病院
新センター長に聞く　島田 聡史　15
専属医師に聞く　澤田 誠司　16
新任医師に聞く　広川 雄三　17

■天満橋総合クリニック
院長に聞く　浦上 昌也　18

関西医科大学 地域医療センター

万が一、でも“頼れる病院”として
関西医大の災害対策

西日本の南の海上を震源とする、通称〝南海トラフ巨大地震〟。
政府発表によると今後30年内に約80％の確率で発生するとされる
この巨大災害が発生したら――。
関西医大では地震に限らず水害など、万が一大災害が発生した際にも
北河内のくらしを守る頼れる病院として稼働できるよう、様々な対策を整えています。

本学附属病院と総合医療センターは、大阪府指定災害拠点病院（地域災害医療センター）です。

災害拠点病院の指定要件

◎建物が耐震耐火構造であること。
◎資器材等の備蓄があること。
◎応急収容するために転用できる場所があること。
◎応急用資器材、自家発電機、応急テント等により自己完結できること。
（外部からの補給が滞っても簡単には病院機能を喪失しないこと）
◎近接地にヘリポートが確保できること。

大阪府は災害対策基本法に基づいて、府内や近隣で災害が発生して通常の医療体制では被災者に対する適切な医療を提供することが困難な場合に、都道府県知事の要請で傷病者の受け入れや医療救護班（Disaster Medical Assistance Team＝DMAT）を派遣する病院として、災害拠点病院を指定しています。また、本学は北河内二次医療圏をカバーする地域災害医療センターとして、附属病院と総合医療センターが指定を受けています。

附属病院

大学病院本院として、北河内二次医療圏の災害医療拠点として、抜かりなく。

附属病院は、2006(平成18)年に大阪府から災害拠点病院(地域災害医療センター)に指定されました。北河内二次医療圏域においては、関西医科大学総合医療センターとともに、その機能を果たしています。

万が一大規模地震などの災害が発生した場合、多数の被災者を迅速かつ円滑に受け入れられるよう救命救急センターが中心となり、行政や消防、医療機関など、地域の関係機関と連携した実践的な災害訓練を、年1回実施しています(直近2年は新型コロナウイルス感染症の影響を受けて机上演習で代替)。

また、災害医療に携わる自己完結型のDMATも保有し、派遣機能を整備している他、枚方防災ヘリポートが病院隣接地に設置されており、傷病者の受け入れや搬出を行う広域搬送への対応機能も有しています。

免震構造(免震ゴム)

附属病院の基礎部分は免震ゴムによる免震構造を採用しています。そのため、2018年に震度6弱を記録した大阪北部地震の際も、エレベーターや各種配管に致命的な損傷は受けず、速やかに復旧することができました。

非常用ディーゼル発電装置

安全で安心できる医療の提供には、電気が必要不可欠。附属病院では大規模災害時の停電でも、隣接する淀川が氾濫しても変わらず医療を止めないため、屋上に灯油で稼働するディーゼル式の自家発電装置を設置しています。

災害備蓄

災害発生時に備えた医療物資や医薬品の備蓄は欠かせません。附属病院では、災害発生直後から3日間は外部からの補給・納品がなくても全ての入院患者さんに対応できるよう、医薬品や食料品の備蓄を行っています。

DMATの活動

附属病院のDMATは、救急医学科を中心に医師・看護師・業務調整員で構成され、専門的な訓練を受けた医療チームとして東日本大震災(2011年)や熊本地震(2016年)などの大規模地震はもちろん、大阪北部地震(2018年)・台風21号の強風によるタンカー連絡橋衝突事故(同)で孤立した関西国際空港での医療支援など、さまざまな災害発生時に派遣されています。今後も南海トラフ巨大地震だけでなく、多くの傷病者が発生する大事故・大災害に備えて、鍛錬と準備を進めます。

熊本地震の際に被災地で活動するDMATの様子

いつ、何があっても、普段と変わらない医療クオリティをお届けするためのBCP

BCP(Business Continuity Plan)とは、「震災などの緊急時に低下する業務遂行能力を補う非常時優先業務を開始するための計画」(厚生労働省)で、どんな状況に陥っても継続して事業を展開するために必要な計画をあらかじめ構築しておくことです。本学は、このBCP策定を法人の経営目標として位置づけており、各付属医療機関における整備を積極的に推進しています。

万が一の災害発生時にも、いつもと変わらない大学病院クオリティの医療サービスを提供するために。私たちの進化は続きます。

医療機関におけるBCP

- 災害医療への対応
- インフラ維持
- バックアップの準備
- ライフラインの復旧フロー
- スタッフの招集、確保
- 業務の優先順位付け
- 必要物品の手当、手配
- 通常時のスタッフ教育　など

※病院、大学におけるBCP整備状況　策定済み病院:約25%(2018年時点)　策定済み大学:約9.4%(2017年時点)

総合医療センター

関西医大グループとして、災害医療を担うために。

総合医療センターは、附属病院に先んじて1996年に北河内二次医療圏域の災害拠点病院（地域災害医療センター）に指定されました。国土交通省が指定している「地震時等に著しく危険な密集市街地」を多く抱える守口市（病院所在地）・門真市・寝屋川市の災害医療拠点として、各種の整備・準備を進めています。

例えば、附属病院と同等の機能・規模を持つDMAT・救命救急センターを擁し、平常時の災害対応訓練も定期的に開催。重要設備の屋上設置も徹底し、淀川の氾濫時にも診療機能の低下を回避可能です。

また、2018年には旧本館跡地にホスピタルガーデンを開設し、災害時には一時避難所として活用されることを想定しています。さらに、2021年には災害時の人工透析などで必要となる水を確保するため、災害用井戸を整備。地元の〝頼れる〟災害拠点病院としての機能強化に努めています。

DMAT

附属病院と合同で政府主催の大規模地震時医療活動訓練に参加した際の様子。写真奥は自衛隊輸送機。厚労省・警察・消防・自衛隊など関係機関との連携もDMATの強みです。

ホスピタルガーデン

災害時一時避難所として、広大な空間を確保。近隣住民の皆さんに災害時の安心を提供しています。

災害用井戸

災害で断水・水質の低下が発生しても人工透析など止められない医療を止めないために、ホスピタルガーデン内に井戸を掘削しました。

香里病院・くずは病院

北河内の医療を、止めない。

香里病院

大地震の揺れは、建物だけでなく入院患者さんにも深刻なダメージをもたらします。香里病院はそうした被害を最小限に防ぐため、免震ゴムと制振ダンパーを基礎部分に装備。備品・食料品の備蓄も進めており、万が一の大災害に備えています。

香里病院

香里病院の建物については、基礎部分に免振装置を設置しており、免振ゴムと振動を吸収する制振ダンパーにより地震の揺れを吸収することで建物のダメージを最小限に止め、震度7クラスの地震にも耐えうる構造となっています。

香里病院では災害に備え5・6階病棟に備蓄倉庫を設け、入院患者さん及び職員の3日分の水や食料、簡易トイレを備蓄しております。

くずは病院

くずは病院では年に2回、定期的な防災訓練を行うことで職員に災害への意識を喚起し、対応力の強化に努めています。また、入院患者さんのための食料も備蓄（3日分）。病院長・事務部長がBCPに関する外部研修を受講した他、対策会議の刷新も計画しています。

くずは病院

関西医科大学附属病院
上部消化管外科
診療教授
井上 健太郎
Kentaro Inoue

胃がん治療と減量・代謝改善手術で地域医療に貢献していく

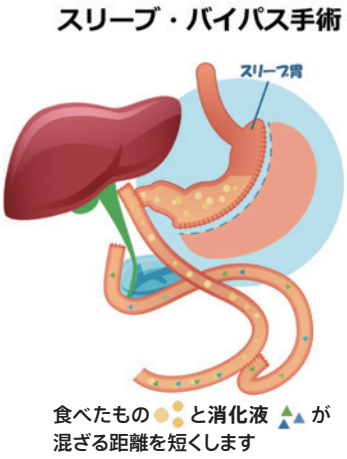
New Professor Interview

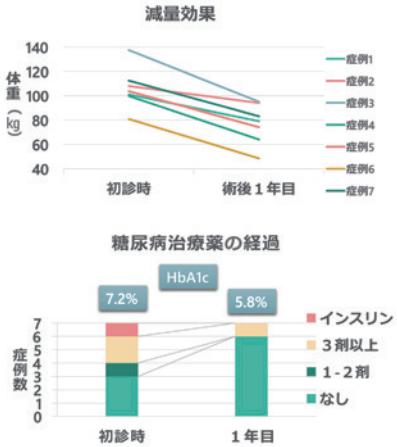
新任教授に聞く

長く胃がん診療の研鑽を積み、肥満や糖尿病に対する減量・代謝改善手術にも力を入れてまいりました。地域の先生方にはこれまでも病診連携などを通じてお世話になっておりますが、この度、診療教授に就任いたしましたので改めてご挨拶申し上げます。

地域一帯で病診連携を進めるために私がすべきことは、クリニックの先生方がどのようなことにお困りか、私たちに何が期待されているかを知ることだと考えています。これまで北河内エリアの医療機関を訪問させていただいた際には、緊急時にも対応してほしい、地域の医療機関で対応可能なことは任せてほしいといった声を伺い、体制の改善にあたってまいりました。たとえば内視鏡検査で胃がんが強く疑われる場合、組織検査まで時間がかかることがあるかと思いますが、もし当院へのご紹介が初めてでも組織検査の結果を待たずご連絡いただいて大丈夫です。当科ではこれまで胃がん術後の地域連携パスについても400件超の実績があります。患者さんにとってより早く適切な治療を提供し、安心して地域にお戻りいただけるよう、より一層の体制強化に努めてまいりますので引き続きよろしくお願いいたします。

また今後は胃がん診療だけでなく、減量・代謝改善に対する腹腔鏡下スリーブ・バイパス手術でも地域医療に貢献したいと考えています。2021年9月に刊行された日本肥満症治療学会・日本糖尿病学会・日本肥満学会の合同ステートメントでは、BMI35kg／㎡の糖尿病に対して手術が推奨されることになりました。当院は肥満症外科手術認定施設に選定されており、健康科学センターとの多職種によるチーム体制で生活習慣病ケアを提供しております。糖尿病、高血圧、高脂血症、睡眠時無呼吸、変形性膝関節症などの肥満関連疾患に対する疾患を診療される先生方が、どのようなご要望やお困りごとを抱えていらっしゃるか、ぜひお目にかかってお伺いしたいと思っております。





PROFILE

1993年3月	関西医科大学医学部 卒業
1993年6月	関西医科大学第2外科学講座 研修医
2003年3月	関西医科大学大学院博士課程 修了
2006年1月	関西医科大学外科学講座 助教
2012年2月	関西医科大学外科学講座 診療講師
2012年4月	関西医科大学外科学講座 講師
2014年4月	関西医科大学外科学講座 准教授
2020年4月	関西医科大学附属病院 消化管外科 病院教授
2021年12月	関西医科大学外科学講座 診療教授

臓器温存を目指した合併切除手術で高度進行食道がんへアプローチ

関西医科大学附属病院
消化管外科
病院教授
山﨑 誠
Makoto Yamasaki

Speciality Service Interview

食道がん手術症例ご紹介

2006年から食道がんを専門に診療・研究を行い、これまでの手術症例数は前職の施設で約1、400例、全国各地の他施設で約250例、そして当院での70例、計約1、700例です。自施設以外での手術や高度進行がん手術、難治症例に対する手術経験は、同年代において日本で最も多く経験のある一人だと自負しています。

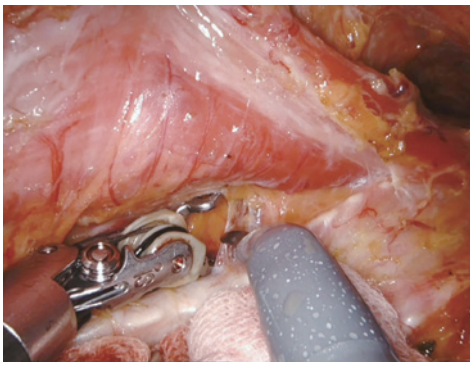
私が医師として情熱を注ぐことの一つに高度進行食道がんへのアプローチ、具体的には臓器の機能温存を目指した合併切除があります。食道がんにおいては隣接する重要臓器(大動脈、心臓、気管など)への浸潤が致命的となる患者さんが少なくありません。しかし私は切除不能といわれるケースでも合併切除による根治を目指す手術を行ってまいりました。これまでおよそ100例を手がけ、国内屈指の症例数を経験しております。

特に気管の合併切除は、耳の軟骨を用いた自家組織移植によって発声機能を温存する術式を開発しました。初の対象者となった患者さんは術後3年が経過する現在も元気に過ごされています。

もう一つのライフワークにロボット手術があります。当院では昨年度まで腎泌尿器外科のみでの実施でしたが、私の着任以来、消化器外科領域でも着実に実績を重ねています。食道がんの治療法は抗がん剤治療や放射線治療を組み合わせた集学的治療が欠かせません。高度な侵襲を伴うことも多いため、地域の先生方におかれましては早期にご紹介いただければと思います。

また食道がん患者は高齢者が多く、術後の体力低下や他疾患の併存を認めるケースがよくあります。術後はご紹介いただいた先生方と連携し、日常生活をより快適に過ごせるようサポートすることが最も重要であると考えています。前職では自治体・製薬会社と共同で術後の患者さんに対する健康増進プログラムを実施し、手応えを感じていました。当院でもぜひそういった活動を展開していきたいと考えています。

ロボット支援下食道癌手術



視野の安定性・関節機能による手術操作で
さらに精緻な手術が可能に!

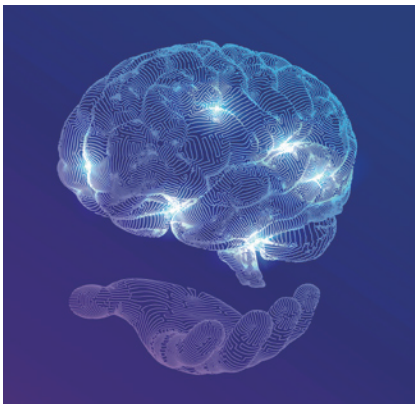
PROFILE

1996年3月	大阪大学医学部 卒業
1996年4月	大阪大学医学部附属病院 研修医
1997年4月	市立貝塚病院 外科医員
2001年4月	大阪大学医学部 病態制御外科 研究生
2002年1月	DNAチップ研究所 客員研究員兼任
2005年5月	大阪大学医学部附属病院 消化器外科医員
2006年7月	大阪大学大学院 消化器外科 助教
2015年5月	大阪大学大学院 消化器外科 講師
2017年4月	大阪大学大学院 消化器外科 上部消化管グループチーフ 副科長
2017年11月	大阪大学大学院 消化器外科 准教授
2018年4月	大阪大学医学部附属病院 病院教授
2021年4月	関西医科大学 外科学講座 准教授
2022年2月	関西医科大学附属病院 消化管外科 病院教授

関西医科大学附属病院からのお知らせ

大学病院の、脳ドック。

血液・尿検査
心電図
頸部エコー検査
脳MRI検査
身体測定
認知機能検査
診察・結果の概要説明



当院では、第1・3・5土曜日午前に3名限定の「脳ドック」サービスを開始しました。3テスラの高性能MRIによる高画質・高精細な脳検査だけでなく、大学病院として最先端の医学的知見に裏打ちされた基礎検査、頸部エコー検査を実施。また、多数の症例に磨かれた認知機能検査や第一線で活動を続ける専門医のノウハウで、異常の早期発見を目指します。但し、心臓ペースメーカー・心臓人工弁（金属製）を装着されている方や、脳動脈瘤の手術を受けた方、妊娠中、閉所恐怖症の方には提供できませんのでご注意ください。

ドック料金 **70,000円**（税込み）
※各種助成金利用可

お問い合せ先
関西医科大学附属病院　事務部医事課
TEL.072-804-0101

- 毎月奇数週
- 土曜日午前
- 3名/1日限定
- 完全予約制

詳細はこちらのQRコードからご覧いただけます

関西医科大学附属病院

地域連携Webセミナー

当院では、地域の先生方に向けて定期的に最新情報を発信するためのWebセミナーを企画しています。

第1回 **4/16**（土） 14:00～16:00
脳卒中地域連携、胎児治療の導入 など

第2回 **8/20**（土） 14:00～16:00（予定）
皮膚科、形成外科領域の最新治療 など

第3回 **2023年予定**　※調整中
腎泌尿器外科領域の最新治療など、調整中

お問い合せ先
関西医科大学附属病院　地域医療連携部
TEL.072-804-2742

- 視聴は無料です
- 事前申し込みが必要です
- 調整中の内容は、確定し次第改めてご案内差し上げます

第1回の視聴は、右記QRコードからお申し込みいただけます

関西医科大学附属病院からのお知らせ

オンライン・セカンドオピニオン外来。

相談時間
60分（最大）

利用料金
44,000円（税込み）

1 FAXにてお申し込みください
FAX.072-804-2861
※申込書、患者保険情報連絡票は、本ページ右下部のQRコードからダウンロードください

2 診療情報提供書、各種検査・画像データを患者さんにお渡しください

3 担当医に確認の上、相談日時を患者さんにご連絡します
※日程調整に1週間程度お日にちがかかります。また、相談内容によっては対応致しかねる場合がありますので、あらかじめご了承ください。

高度情報化社会の進展により、医療に対する多角的な意見を求める患者さんのニーズは高まっています。こうした社会情勢も踏まえて当院では、従来から活用が進むセカンドオピニオンサービスのオンライン版をスタートさせました。当院の営業時間内であればいつでも、どこからでも、多数の症例を経験して様々な角度から研鑽を積んだ専門医がセカンドオピニオンを提供いたします。患者さんからお申し出があった際は、下記特設ページをご確認いただき、必要書類をダウンロードの上患者さんにご説明ください。

書類送付先
関西医科大学附属病院　地域医療連携部　病診連携課　オンライン・セカンドオピニオン担当
〒573-1191　大阪府枚方市新町2-3-1

お問い合せ先
関西医科大学附属病院　地域医療連携部
病診連携課　オンライン・セカンドオピニオン担当
TEL.072-804-2742

●オンライン・セカンドオピニオン外来のご利用には、当院の診療費後払いサービスへの登録が必要です

詳細はこちらのQRコードからご覧いただけます

いかなる状況下でも安心・安全な医療をスムーズに提供するために

Speciality Service Interview

コロナ禍における感染制御について

関西医科大学総合医療センター
感染制御部 部長

三島 伸介

Nobuyuki Mishima

感染制御部は感染症専門医、感染管理認定看護師、感染制御認定薬剤師など専門資格を有するスタッフで構成されている部門です。総合医療センターが皆さまにご安心いただける運営体制を維持できるよう、かつ各領域の専門業務が円滑に進むように、感染制御の観点から啓発やサポートを行っており、いわば当院全体の潤滑油のような存在です。

特に現在、当院ではコロナ患者病棟を設け一般病棟と分けて運営していますが、どちらの病棟、またどの診療エリアにおいても患者さん、従事するスタッフが安心して過ごせるよう、病院全体で随時コロナ対策会議を開き意見交換を行っています。当院がコロナ患者さんの受け入れと同時に通常通りの入院・外来診療を維持できているのは、第一線で治療にあたる医師、医療スタッフの懸命な仕事ぶりと、病院全体の感染制御に対する取り組み、この両輪がうまく機能しているからこそだと考えております。

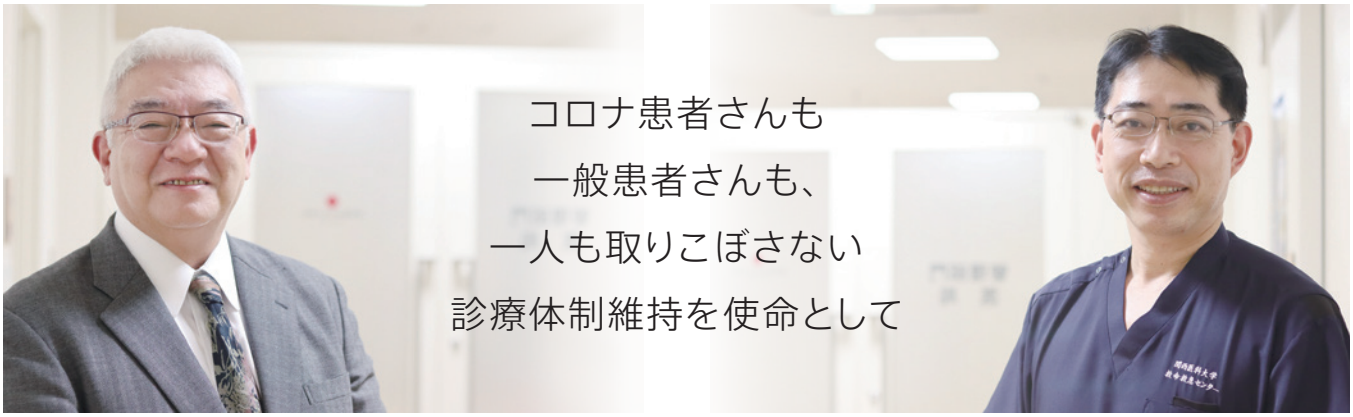
私はかつて心臓外科を学ぶために中国・北京へ研修に訪れていた際、SARS（重症急性呼吸器症候群）の流行を受け、WHOと中国衛生部の感染症調査隊に参加し、そこでかつての天然痘撲滅チームの一員だった医師との出会いもあり、渡航医学、感染制御の領域に携わるようになりました。細菌やウイルスがヒトにもたらす影響は決してネガティブなことばかりではありません。しかしSARSや新型コロナウイルス感染症からもわかるよう、ひとたび感染症として流行してしまえば罹患した個人のみならず地域、社会に広く影響を及ぼします。つまり感染予防とは、社会全体を守ることでもあるのです。

状況が落ち着きましたら、ぜひ新型コロナウイルスに限らず感染対策について、地域の先生方と情報交換、意見交換を行っていきたいと考えております。エビデンスに基づいた感染予防策のみならず、知恵やアイデアを持ち寄り、地域全体で人々の暮らしを守るための感染症対策を高めていけるよう微力ながら尽力してまいります。

PROFILE

1998年3月	関西医科大学医学部 卒業
1998年4月	関西医科大学附属病院 胸部外科 入局
2000年5月	首都医科大学附属友誼病院 胸心血管外科
2003年6月	北京滞在中、重症急性呼吸器症候群（SARS）の世界的流行を受け、WHOと中国衛生部による合同調査隊（臨床感染制御）に参加
2007年4月	関西医科大学 公衆衛生学講座（現 衛生・公衆衛生学講座）
2007年7月	関西医科大学総合医療センターにて海外渡航者医療センターを開設
2014年4月	りんくう総合医療センター 総合内科・感染症内科 勤務
2021年4月	関西医科大学総合医療センター 感染制御部 部長、海外渡航者医療センター 外来担当

コロナ禍における取り組み



Speciality Service Conversation

コロナ禍における救急搬送の受け入れについて

関西医科大学総合医療センター
副病院長

室田 卓之

Takashi Murota

PROFILE

1984年3月	関西医科大学医学部 卒業
1984年6月	関西医科大学 泌尿器科 研修医
1984年12月	関西医科大学 泌尿器科学講座 助手
1987年1月	関西医科大学付属香里病院 泌尿器科 外来医長
1991年4月	関西医科大学附属洛西ニュータウン病院 泌尿器科 医長
1996年10月	関西医科大学附属香里病院 泌尿器科 外来医長
2001年6月	関西医科大学 泌尿器科学教室 講師
2002年4月	関西医科大学附属香里病院 泌尿器科 部長
2006年1月	関西医科大学附属滝井病院 (現・関西医科大学総合医療センター) 腎泌尿器外科 診療部長、医療安全管理部 部長(併任)
2008年4月	関西医科大学附属滝井病院 中央手術部 部長(併任)
2011年3月	関西医科大学附属滝井病院 副病院長
2012年4月	関西医科大学附属滝井病院 地域医療連携部 部長(併任)
2018年4月	関西医科大学総合医療センター 病床運営管理部 部長

関西医科大学総合医療センター
総合集中治療部 部長

吉矢 和久

Kazuhisa Yoshiya

PROFILE

1997年3月	大阪大学医学部医学科 卒業
1997年6月	大阪大学医学部附属病院 特殊救急部 医員(研修医)
1998年6月	国立東静病院レジデント(外科研修)
2004年3月	大阪大学大学院医学系研究科博士課程 修了
2004年4月	大阪大学医学部附属病院 特殊救急部
2007年9月	阪和記念病院 脳神経外科 医長
2007年12月	大阪大学医学部附属病院 高度救命救急センター 医師
2008年8月	大阪大学医学部附属病院 救急医学科 助教
2010年4月	米国ハーバード大学ベス・イスラエル・ディーコネス・メディカルセンター 研究員
2019年8月	関西医科大学総合医療センター 救急医学科 病院教授
2019年9月	関西医科大学総合医療センター 総合集中治療部 部長

室田　コロナ禍が始まって以来、規模の大小に関わらず、医療関連施設は未曾有の事態への対応に迫られる日々が続いております。地域の先生方におかれましても、さまざまなご配慮や工夫のうえ診療を続けていらっしゃることと思います。

当院では新型コロナウイルスが流行の兆しを見せた当初より、従来の診療体制に加えコロナ患者さん、特に重症患者さんの積極的な受け入れを続けてまいりました。敷地内にある南館の救命救急センターに現在は52床のコロナ病床を設け、持病やケガで手術が必要なコロナ患者さんの受け入れ、手術対応も行っています。

吉矢　これまで当院は国内の大学病院でトップレベルの新型コロナ重症症例を受け入れてきましたが、これは救急医学科診療部長である中森医師をはじめ、救急医療にあたる全スタッフの「一人の命も取りこぼさない」という熱意によるものです。2021年11月には大阪府の要請を受け、同館内に大阪コロナ重症センターを設置しました。新型コロナウイルスの流行初期から多くの患者さんを受け入れてきたことが評価されているのではと受け止めております。

室田　従来、救命救急センターは救急患者さんのファーストコールが入る窓口でしたが、現在はコロナ患者さんの専用病棟となり、さまざまな地域、他医療機関より対応困難な症例を受け入れる専門病棟となっています。

そこで2020年12月より、各診療領域の協力のもと新たにER型救急の体制を整えました。救命救急医療機関としての機能を維持しながら、コロナ患者さんと一般患者さん、どちらにも可能な限りのマンパワーを割り振るための施策です。その中心を担っているのがGICU(総合集中治療部)の吉矢医師です。

吉矢　GICUは以前より、救命救急センターに搬送されてくる患者さんの受け皿としての機能を果たしていました。そこで各診療科の橋渡し役、急変患者さんの対応にあたっています。

一次救急・二次救急の患者さんについて各診療科、一般病棟と連携をとりながら役割分担して運営しています。また当院で三次救急の病床が確保できない場合には、枚方の附属病院に繋ぐことも可能です。

室田　当院をかかりつけとして受診されている患者さんはもちろん、地域の先生方からのご紹介患者さんも従来どおり対応する体制を整えてまいります。また今年4月には以前から計画していた予定を早め、GICUを9床、HCU(高度治療室)を8床に拡張し、一般重症患者さんの受け入れ体制を拡充します。

まだまだ緊張を強いられる日々は続きそうですが、北河内エリア、特に守口市や門真市近辺で頼りにしていただける病院であり続けるよう、常に一丸となって迅速な診療体制を整え、維持に努めますので、地域の先生方にはご安心いただければと存じます。

退院後まで見据えたご案内で患者さんと病棟、そして地域へのかけ橋に

Speciality Service Interview

入院前支援の充実

関西医科大学総合医療センター
地域医療連携部
入院前支援
平谷 栄美
Emi Hiratani

医療・介護に対する需要が増えることが想定されており、国は地域包括ケアシステムの構築を推進しています。これまで当院においても、病気を抱える患者さんが地域で安心して生活できるよう、地域・外来・入院での経過を切れ目なく支援する「継続看護」に努めてまいりました。その一翼を担うのが、「入院前支援窓口」です。

入院前支援では、入院を迎える患者さんやご家族に看護師が面談を行います。入院中の治療・検査に関する情報をお伝えしたり、患者さんの社会的背景・ご不安をヒアリングしたりすることで、安心して入院生活に臨んでいただくことが目的です。具体的には入院前支援計画書やクリニカルパスを用いて説明を行い、入院中の生活をイメージしていただきます。そして必要なケアを入院直後から提供できるよう、患者さんやご家族の思いをうかがい、身体的・社会的・精神的な背景の状況を確認。服薬中の薬剤や栄養状態、嚥下機能の状態なども把握し、すべての情報を患者さんのケアにあたる医師や看護師、薬剤師、管理栄養士など関連職種と共有します。

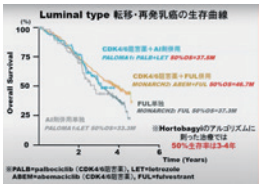
また、私たちは退院後を見据えたサポートも実施しています。ご利用中の介護・福祉サービス、退院後の生活における不安や障壁となり得ることをうかがい、退院支援看護師やソーシャルワーカー、併設のケアプランセンターのケアマネージャーとカンファレンスを実施。患者さんには各種サービスの利用、介護福祉物品の活用など、退院後の生活のご不安解消につながる策をご提案しています。

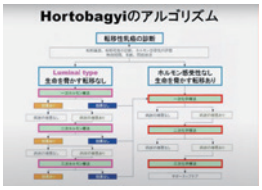
面談時、ご不安が強い患者さんやご家族にはその場で他の職種と連携するなど、どなたも安心してご入院いただける環境づくりを心がけております。これからも患者さんやご家族の心に寄り添い、地域の皆さまと当院をつなぐかけ橋として、継続看護の実践に尽力してまいります。

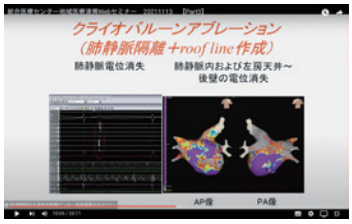
PROFILE

1990年　関西医科大学附属看護専門学校 第2看護学科 卒業
　　関西医科大学附属病院（現・関西医科大学総合医療センター）入職
　　看護師免許取得
1999年　大阪赤十字助産婦学校 卒業
　　助産師免許取得
2020年　関西医科大学総合医療センター 地域医療連携部へ異動

医療従事者の方々に向け、気軽にご視聴いただけるWeb型セミナーを実施しています







Speciality Service Interview

医療従事者向け 地域連携Webセミナー

昨年より実施している「地域医療連携Webセミナー」についてご紹介します。従来のセミナーは、参加者同士が顔の見える対面形式で実施しておりました。最新の医療トピックスを共有したり貴重なご意見をうかがったりと、ご参加いただく先生方にも私たちにも有意義な交流の場であったと自負しております。

しかし新型コロナウイルス感染症のまん延により開催が難しくなり、打開策としてスタートしたのがWeb型セミナーです。初回は昨年7月に開催し、企画・運営から地域の先生方へのお声がけまですべて模索しながらでしたが、ご登壇いただいた先生方やエントリーくださった皆さまのおかげで大盛況のうちに終えることができました。予想を超える約300名にご視聴いただき、その後11月に第2回、今年3月に第3回と継続的に開催。当院の活動を機に関連する附属病院でもそれぞれが同様のWebセミナーを開催する運びとなり、喜ばしい展開を迎えております。

Web型セミナーの内容は、循環器、腎臓、代謝など毎回メインテーマとなる領域を据え、複数の学術講演＋αで幅広い話題をご提供できるよう心がけています。気軽にご視聴いただけますので、医師に限らず医療に従事される方々も、ご興味をお持ちいただけましたらぜひご参加ください。

交流という観点から見ると、やはり対面形式に勝るものはありません。しかしキャパシティに上限がないこと、遠方の方でもご参加可能なこと、リアルタイムで視聴が難しい場合にもオンデマンド配信でご覧いただける点など、Web開催ならではの良さを発見しました。当面はWeb形式での開催を予定しておりますが、世情が落ち着いた暁にはセミナーを"直接参加型＋Web視聴型"のハイブリッド形式へ進化させたいと考えています。2022年度からは従来のように地域の先生方にもご登壇いただきたいと企画を進めているところですので、さらなる発展にご注目ください。

関西医科大学総合医療センター
地域医療連携部 部長
徳原 克治 Katsuji Tokuhara

PROFILE

1996年3月	関西医科大学医学部 卒業
1996年5月	関西医科大学 外科 入局
2008年4月	関西医科大学附属枚方病院（現・附属病院）外科 助教
2012年4月	関西医科大学附属枚方病院（現・附属病院）外科 診療講師
2014年4月	関西医科大学附属滝井病院（現・総合医療センター）外科 診療講師
2015年5月	関西医科大学総合滝井病院（現・総合医療センター）外科 講師
2016年5月	関西医科大学総合医療センター 外科 病院准教授
2017年4月	関西医科大学総合医療センター 地域医療連携部 部長
2021年4月	関西医科大学総合医療センター 骨盤機能センター センター長

総合診療科を創設。地域密着型病院として包括的ケアシステムの構築を目指します

New Professor Interview

新任教授に聞く

関西医科大学香里病院
内科・総合診療科
部長

石丸 裕康
Hiroyasu Ishimaru

2021年10月に当院へ着任いたしました、石丸と申します。医学生だった頃に公衆衛生など社会医学に強く惹かれ、専門診療よりも総合診療に携わりたいと、当時いち早く総合診療科を設けていた天理よろづ相談所病院へ勤めました。前職では総合診療・総合内科およびリウマチ・膠原病領域の臨床と、初期・後期研修医教育、救急診療などに従事し、診療分野としては不明熱をはじめ診断がつかない事例、リウマチ・膠原病、感染症患者、高齢者医療などを主としておりました。当院においても、総合診療科部長として幅広い診療を心がけてまいりますのでよろしくお願いいたします。

総合診療科とは

当院では今年1月から「内科・総合診療科」を設けました。総合診療は「プライマリ・ケア」とも称され、特定の臓器や疾患に着目するのではなく、内科・外科・小児科など幅広い知識を備えた医師が患者さんを総合的に診ることを指します。

たとえば、慢性的な疾患に加えて肺炎や腎盂腎炎のような感染症を発症した患者さん、また「所見では原因がよくわからないが具合が悪い」「どの診療科へ紹介するのが適切か判断しかねる」といった方の受け入れ窓口としての機能を担っておりますので、そういった患者さんがいらっしゃればご紹介ください。領域をまたぐ複数の病態を抱える患者さんを診療することも可能です。治療が終われば地域にお帰りいただくよう努めておりますし、必要があれば当院や関連病院の専門領域で適切なケアを提供いたします。

（次ページに続く）

PROFILE

1992年3月	大阪大学医学部 卒業
1992年5月	天理よろづ相談所病院 ジュニアレジデント
1994年5月	天理よろづ相談所病院 シニアレジデント（内科ローテートコース）
1996年5月	天理よろづ相談所病院 チーフレジデント（内科ローテートコース）
1997年5月	天理よろづ相談所病院 総合診療教育部 医員
2008年5月	天理よろづ相談所病院 救急診療部 副部長（兼任）
2011年4月	天理よろづ相談所病院 総合診療教育部 副部長
2018年1月	天理よろづ相談所病院 救急診療部 部長（兼任）
2021年10月	関西医科大学 理事長特命 教授 （総合診療医学講座（地域医療学））、 関西医科大学香里病院 総合診療科 部長

地域が一体となる医療のインフラ構築に貢献したい

私は自身が携わってきた総合診療領域の動向や、コロナ禍における診療状況を考える中、診療所から中小規模病院を基盤とするプライマリ・ケアのインフラストラクチャーの確立が現代の課題であると考えています。

というのも高齢者が増える今、これまで当たり前であった〝普段はかかりつけ医のもとへ通い、何かあれば大きな病院の急性期医療にかかる〟という医療の在り方だけではフォローできない部分が出てきていると感じるからです。たとえば加齢とともに日常生活能力が少しずつ落ち、感染症や転倒による骨折などによって入院と退院を繰り返す方も増えています。一人の患者さんを包括的に診ていくためには、地域による包括的なケアシステムの実現が欠かせません。クリニックと大病院を繋ぐハブとしての役割を果たす中小病院の存在も、プライマリ・ケアを構成する一つの大きな要素だと考えています。

私たち香里病院は、地域に根ざした病院として先生方、医療・介護従事者の方々と〝顔の見える〟ネットワークを組み、エリア一帯が一つのチームとしてプライマリ・ケアを展開できる地域づくりに尽力していきたいと考えています。

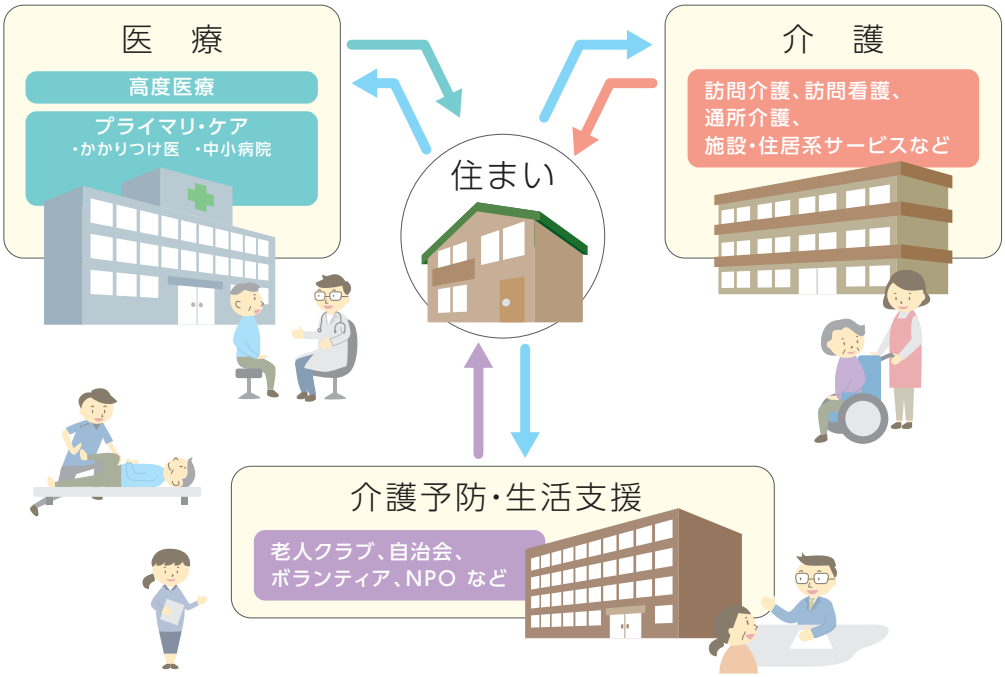
後進育成にも尽力します

私が関西医科大学に着任した目的のもう一つが、プライマリ・ケアの担い手の育成です。

プライマリ・ケアの本来の役割とは、患者さんが心身の不具合時に気軽に相談できる相手というだけでなく、年齢に応じた予防接種や検診の実施、介護・福祉の相談対応など、人の一生に寄り添ったサービスを提供することです。近年では日本でもかかりつけ医の必要性が注目されて、2018年の新専門医制度より専門医資格として「総合診療専門医」が確立されたことはご存じの通りです。今後の日本において、プライマリ・ケア領域で実力を発揮してくれる人材を育てたい。その思いから医育機関である本学に着任した次第です。

地域密着型の香里病院として、必要な患者さんに包括的、かつ継続的ケアを十分届けられるよう、地域医療の仕組みづくりに貢献すること。そして総合診療医をはじめとするジェネラリストの養成を通じ、地域にさらに貢献することを目指します。よろしくお願いいたします。

患者さんの暮らしを支える地域包括ケアシステム



香里病院は、ERを始めました

本学では今後迎える超高齢社会における医療環境の激変に対応するため、香里病院に総合診療医学講座（地域医療学）を設置するとともに、10月から新たに総合診療科を開設しました。内科と一体化した「内科・総合診療科」として運用を開始するとともに、2022年1月上旬から内科・総合診療科、整形外科による非通年制（平日のみ）夜間救急体制（ER）をスタートいたしました。

ERの目的は医育機関として内科・総合診療科が担う総合診療専攻医・総合内科専攻医・初期研修医等若手医師や医学生の教育・育成を主としております。更にかかりつけの患者さんをはじめとした地域医療への貢献を目指しております。

能動的な病診連携で、地域全体を巻き込み呼吸器領域医療を向上させたい

Speciality Service Interview

KORIプログラム

関西医科大学香里病院
内科（呼吸器）病院教授
延山 誠一
Seiichi Nobuyama

「つなぐ11号」では、その前年に発足した「KORIプログラム」をご紹介しました。当時のプログラムはCOPD（慢性閉塞性肺疾患）患者さんに対するケアが主軸でした。しかし活動を続ける中で呼吸器疾患全般に対するスキルアップ支援のご要望が届くようになり、現在は複数プロジェクトを抱える内容へ進化しています。

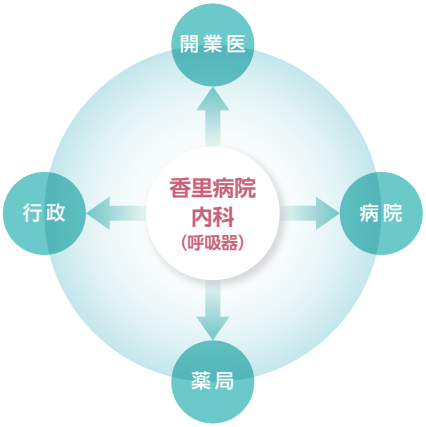
中でも大きな反響をいただいたのが、吸入指導ネットワークの構築です。喘息とCOPDに処方される吸入薬について、2021年度より吸入薬指導加算が新設されました。そこで当院ではWeb勉強会を開催し、計3回で約300名の薬剤師の方にご参加いただき、地域における医療系勉強会では国内でも他に類を見ないほどの大成功となりました。これを発展させ、当院では寝屋川市内のクリニック・病院で使用可能な吸入チェックシートを作成し無償提供しています。すでに約30の医療機関でご活用いただいており、さらなるご要望にお応えして追加の勉強会を今年度にも実施予定です。

他にもKORIプログラムでは、従来はほぼ専門病院に限られていた重症喘息の抗体製剤による治療法を広めるべく、寝屋川市内の薬局と複数のクリニック・病院による協力体制を整えました。各院ではすでに患者さんの受け入れをはじめており、専門家と変わらない治療が提供されています。また、慢性呼吸器疾患に対する呼吸リハビリについて近隣の病院へ呼びかけを行い、2つの病院でリハビリが開設されました。当院のリハビリパスを無償で提供しています。

KORIプログラムは学会でも注目され、今年度中に複数の学会、講演会で発表予定です。今後もクリニック・病院・薬局の垣根を越え、行政も巻き込んで地域の呼吸器医療のレベルアップに尽力していきます。ご興味を持っていただける内容があれば、ぜひお気軽に当院の地域医療連携部へご連絡ください。

PROFILE

1993年3月	兵庫医科大学 卒業
1993年6月	兵庫医科大学病院 勤務
1995年7月	西宮市立中央病院 勤務
1997年7月	国立療養所近畿中央病院 勤務
2001年1月	宝塚市立病院 勤務
2002年8月	大阪警察病院 勤務
2004年6月	兵庫医科大学 呼吸器内科 助教
2006年11月	井上クリニック 内科部長
2007年1月	聖マリアンナ医科大学 呼吸器内科講師
2015年4月	国際医療福祉大学熱海病院 呼吸器内科 病院教授
2019年4月	関西医科大学香里病院 内科 准教授
2019年12月	関西医科大学香里病院 病院教授



進化した「KORIプログラム」

Kansai Medical University
COPD & Asthma
Recovery and
Investigate

Total Care Program

プロジェクト一覧

- 官民一体での禁煙活動推進
- 禁煙外来の開設
- 呼吸器リハビリの実施支援
- 吸入指導勉強会
- 寝屋川市COPD病院連携
- COVID-19の画像診断相談
- 重症喘息に対する抗体療法ネットワーク構築

地域に向けた窓口として、シームレスな医療体制の構築に尽力します

Speciality Service Interview

新センター長に聞く

昨年の秋にリハビリテーションセンター長に就任しました。今回、改めてご挨拶申し上げます。

くずは病院ではさまざまな改革を進める中、2020年の病床再編によって52床を有する回復期リハビリテーション病棟を設けました。病棟では他病院で急性期の加療を終えられた患者さんを受け入れ、地域医療と基幹病院の橋渡しとしての存在を担っています。私自身は主に脳卒中や脊髄の病気になられた方を担当しており、整形外科領域についてはスペシャリストである澤田医師が担当している状況です。

回復期リハビリ病棟の何よりの使命は、患者さんに安心して在宅復帰していただくことを目標にしております。その中において、当センターの役割は地域に向けた窓口です。またセンター長としての私の務めは、地域医療に携わる方々との連携強化を通じ、退院後の患者さんの生活の質の向上まで貢献していくことです。今、高齢化社会が進む中で必要とされているのが、切れ目のないケアの提供ではないでしょうか。そこで今後、まずは訪問リハビリステーションやデイケアセンターと連携し、医師の観点から介護保険を用いたリハビリテーションのマネジメントを行っていくことが目標です。当院ではデイケアセンターやケアプランセンターを併設しており、医療と介護をひと繋がりとしてスマートに提供できます。そういった強みを生かしながら、急性期と生活期、医療機関における治療と在宅ケアの連携を強化し、地域全体でのシームレスな医療介護体制構築に貢献したいと考えております。

患者さん一人ひとりに最適なケアを提供できるよう、リハビリに強いくずは病院として、今後も地域の皆さんに頼っていただける体制強化に向けて取り組んでまいります。どうぞご期待ください。

関西医科大学くずは病院
リハビリテーションセンター
センター長

島田 聡史

Satoshi Shimada

PROFILE

2014年3月	関西医科大学医学部 卒業
2014年4月	関西医科大学附属滝井病院（現・関西医科大学総合医療センター）研修医
2016年4月	関西医科大学附属病院 リハビリテーション科
2017年4月	関西医科大学総合医療センター リハビリテーション科
2018年4月	箕面市立病院 リハビリテーション科
2019年4月	喜馬病院 リハビリテーション部
2020年10月	関西医科大学くずは病院 リハビリ科
2021年11月	関西医科大学くずは病院 リハビリテーションセンター センター長

関西医科大学くずは病院
回復期リハビリ病棟
整形外科領域担当

澤田 誠司

Seiji Sawada

多職種連携による心に寄り添うケアで患者さんの笑顔に貢献します

Speciality Service Interview

専属医師に聞く

回復期リハビリ病棟専属の医師として、整形外科領域の患者さんを担当しています。当院へ着任して約2年。自分が担当するしないにかかわらず、多くの患者さんに接してきました。その中で確信しているのが、当院の回復期リハビリ病棟はハイレベルな環境が整っているということです。当病棟へ入院される患者さんの多くが、入院中の目標を達成して退院されます。これは当院の設備やスタッフの技術だけでなく、心に寄り添うケアが実現できていることも所以しているのではないかと自負しております。

たとえば私が担当する患者さんは、腰や股関節、膝関節の手術を受けられた方がほとんどで、リハビリではまず基本の立ち座り、歩行、階段の昇降を着実に獲得していただくことが目標となります。ここで大事になるのが、患者さんご本人の前向きな姿勢です。リハビリは日々の積み重ねですので、やはり当人の努力が欠かせません。しかし当病棟へ転院してこられる患者さんには、急なケガや病気で生活の在り方が変わってしまった、と困惑や不安を抱えている方が多くいらっしゃいます。そういった患者さんに各スタッフが寄り添い、リハビリプログラム以外の時間でも前向きに日常動作の獲得に取り組んでいただけるよう患者さんのメンタル面からケアすること、この点を意識して取り組んでいる結果が、満足度の高い評価に繋がっているのだろうと考えます。患者さんが日常生活動作を獲得し笑顔で退院される場に立ち会うたび、リハビリに携わる医師としてのやりがいを感じます。

私は現在は病棟専属となっておりますので、地域の先生方にお目にかかる機会はなかなかありません。しかし、一人でも多くの患者さんにこの回復期リハビリ病棟から住み慣れた町へ、より元気な状態でお戻りいただくことが地域医療への貢献だと考えております。今後もスタッフ一丸となり、それぞれが得意領域を生かしながらケア体制の充実に努めてまいります。

PROFILE

1991年3月　関西医科大学医学部 卒業
2020年4月　関西医科大学くずは病院 整形外科

画像診断のニーズに応え地域医療へこれまで以上のお役立ちを

関西医科大学くずは病院
放射線科
広川 雄三
Yuzo Hirokawa

New Doctor Interview
新任医師に聞く

放射線科医の広川と申します。今年度、くずは病院放射線科では初の常勤医師として着任しました。当科では開業医の先生方はじめ、他の医療機関からのCT・MRI検査や検査所見のご依頼も承っておりますが、これまで非常勤医による診断でした。放射線科での検査を必要とされる患者さんには、急を要する病状の方もいらっしゃいます。このたび私が常勤医師となったことで従来以上に迅速かつ密な対応が可能になりました。検査を必要とされる患者さんがいらっしゃれば、ぜひお声がけいただければと思います。

当院では現在、一般X線撮影装置、CT装置、MRI、DR・X線TV装置(Cアーム)が稼働しています。強みは検査のみならず、診断結果によって専門領域の医師による診療へスムーズに引き継ぎができる点、そして高度な診察や治療を必要とされる場合に幅広い領域をカバーする関連病院への連携が可能な点です。地域の先生方とリアルタイムでやり取りをさせていただける環境が整い、放射線科として体制が強化できたと自負しております。

画像診断において何よりも大切なのは、正確な撮影と読影です。その使命を全うすべく、日々進歩する当領域の研鑽を積むとともに、必要な情報をより鮮明に写せるよう放射線技師とは日頃からこまめにミーティングの機会を設けています。また私は迅速な検査データの提供をモットーに職務にあたってまいりました。画像診断は正確性とフィードバックのスピードが、その後続く診療へのカギと心得て、院内外を問わず、可能な限り検査日の翌日以内のご連絡を心がけています。

今回の体制強化を機に、放射線科として地域の先生方、患者さんにこれまで以上に寄与できると考えております。検査のご依頼に限らず、当科について、また放射線に関する疑問・ご要望がございましたら、お気軽にご連絡いただけますと幸いです。

PROFILE

1994年3月	関西医科大学医学部 卒業
1994年4月	関西医科大学附属病院 第2外科 研修医
1996年4月	関西医科大学附属病院 放射線科 医員
1998年4月	回生会藤田病院 放射線科
2000年4月	関西医科大学附属病院 放射線科
2001年4月	広川クリニック 放射線科
2008年6月	関西医科大学附属病院 放射線科
2021年10月	関西医科大学くずは病院 放射線科

経営統合から10周年。予防医療の変革期の中で、クリニックは新たな歩みをはじめます

Speciality Service Interview

院長に聞く

当クリニックは2012年4月に前身のOMMメディカルセンターが学校法人関西医科大学と経営統合し、関西医科大学天満橋総合クリニックへと名称を改めました。それから10年経ち、改めて振り返りますと、経営統合で大きく変わったのが施設や運営システムの充実。そして関連附属病院との深化した連携です。厳正な精度管理体制のもと、安全・安心な診療を提供してまいりました。また当クリニックは京阪沿線や大阪市内のみならず、関西各地から受診者を迎えており、多数の病院と良好な関係を保ちながら、受診者の生活環境に合わせた病診連携を実現しています。受診者には医療従事者の方も多く、当クリニックをご信頼いただいている証ではないかと感じております。

近年、予防医療に対する社会的ニーズがますます高まりを見せていますが、外来部門からスタートし、人間ドック健診に重点を置いて進化してきた当クリニックは、時代に先駆けてきた組織であったと自負しています。ここは関西医科大学における予防医療の本丸です。これからも医療の質を高く保ち、皆さまの健康維持・増進に役立てる施設であってほしいと願っております。

私自身は旧OMMメディカルセンター時代から26年勤務してまいりましたが、この春、院長の任期を満了し関西医科大学へ異動することになりました。これからの予防医療は健診により隠れた病気を発見するだけでなく、健診結果から健康増進へ繋げるヘルスプロモーションがより重要になってくるでしょう。またリキッドバイオプシーやAIによる画像診断など、健診の現場に大きな変化をもたらす先端技術が一般に普及する日もそう遠くありません。今後は関西医科大学全般の予防医療に携わり、当クリニックを含めた予防医療の新しい体制づくりに邁進していきます。

京阪沿線における予防医療のさらなる充実、発展に寄与したいと考えておりますので、今後とも当クリニック共々よろしくお願い申し上げます。

関西医科大学天満橋総合クリニック
院長
浦上 昌也
Masaya Urakami

PROFILE

1983年3月	関西医科大学医学部 卒業
1990年3月	関西医科大学大学院 単位修得（第2内科学）
1996年4月	関西医科大学 第2内科学講座勤務を経て、医療法人OMMメディカルセンター 入職
2005年4月	財団医療法人OMMメディカルセンター 所長（常務理事）
2006年4月	関西医科大学 臨床教授
2012年4月	関西医科大学 天満橋総合クリニック 院長、学校法人関西医科大学 評議員

関西医科大学 KANSAI MEDICAL UNIVERSITY 地域医療センター

■ 関西医科大学附属病院

TEL.072-804-0101（代）
https://www.kmu.ac.jp/hirakata/
〒573-1191　大阪府枚方市新町2-3-1
地域医療連携部　病診連携課（地域医療センター事務局）
TEL.072-804-2742　FAX.072-804-2861

■ 関西医科大学総合医療センター

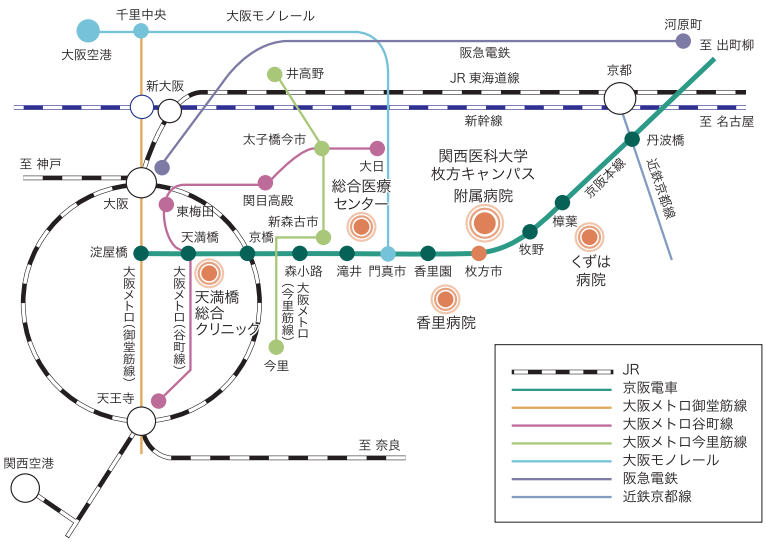
TEL.06-6992-1001（代）
https://www.kmu.ac.jp/takii/
〒570-8507　大阪府守口市文園町10-15
地域医療連携部　病診連携課
TEL.06-6993-9444　FAX.06-6993-9488

■ 関西医科大学香里病院

TEL.072-832-5321（代）
https://www.kmu.ac.jp/kori/
〒572-8551　大阪府寝屋川市香里本通町8-45
地域医療連携部　病診連携係
TEL.072-832-9977　FAX.072-832-9988

■ 関西医科大学くずは病院

TEL.072-809-0005（代）
https://www.kmu.ac.jp/kuzuha/
〒573-1121　大阪府枚方市楠葉花園町4-1
地域医療連携課
TEL.072-809-0013　FAX.072-809-0022

■ 関西医科大学天満橋総合クリニック

TEL.06-6943-2260（代）
https://www.kmu.ac.jp/temmabashi/
〒540-0008　大阪市中央区大手前1-7-31（OMMビル 3階）
TEL.06-6943-2260　FAX.06-6943-9827